

暗くなったら読む話

～眠れぬ夜の奇談集～



エンジン

第一話
雨の日のお迎え

僕が幼稚園の頃の話。

近所にリコちゃんという娘がいた。

元気のいい娘だったけど、父親はいなかった。

大人も子供も、そして僕含めてみんなリコちゃんと呼んでいたのも本当の名前は知らない。

僕はリコちゃんと仲が良く、いつも一緒に遊んでいた。
ある大雨の日。

その日は僕の親もリコちゃんの母親も、
急用で迎えに来るのが遅くなると聞かされた。

外が暗くなり、他の子供は皆お迎えが来て、おゆう
ぎ室にいるのは僕とリコちゃんの二人だけになった。

僕とリコちゃんは先生とカルタをして待っていた
けど、途中で先生が職員室の方に行ってしまった。

二人で先生を待ったが、なかなか来ない。

雨音がどんどん強くなる。

「せんせいおそいなあ、よびにいこう」

そう言って、リコちゃんが僕の袖を引っ張った。

僕も先生を呼びに行きたかったけれど、真っ暗で雨が降ってる外に出るのが怖くて、立ち上がれなかった。

「もうええわ」

リコちゃんは袖から手を放して、部屋の出入り口へと走っていった。

リコちゃんの小さな手が引き戸に触れた瞬間。

外側から、戸が開かれた。

外には、リコちゃんのお母さんが立っていた。

いつもと同じ、優しい笑顔。

「リコちゃん。迎えにきたで」

嬉しそうに、リコちゃんはお母さんの手を繋いだ。

リコちゃんがこっちを向いて、手を振った。

「じゃあ、また明日な」

またね、と僕も手を振った。

お母さんと一緒にリコちゃんは出て行った。

少しして、変だなと思った。

リコちゃんのお母さんは傘も持っていなかったのに、
服が少しも濡れてなかった。

外は雨のはずなのに……。

そんなことを考えていると、先生が慌てて部屋に入ってきた。

「リコちゃんは？ リコちゃんどこいったん？」

先生は慌てていた。

お母さんが迎えに来たで、と僕が言うと、先生は驚いた。

「ウソよ」

「ウソちゃうで、いまさっききたもん」

「そんなん……リコちゃんのお母さん、今、病院で亡くならはったんやんで！」

後で知ったことだけど、リコちゃんのお母さんは、
幼稚園に来る途中でトラックと衝突し、病院で死んだらしい。

先生はそのことについて、病院から電話で連絡を受けたのだそうだ。

リコちゃんは行方不明になった。

今でも、持ち物一つすら見つからない。

何度も何度も、リコちゃんを連れて行った人について聞かれた。

でも、あれは間違いなく、リコちゃんのお母さんだった。

でも、誰からも、全く信じてもらえなかった。

今でも時々思うことがある。

リコちゃんのお母さんは、なぜリコちゃんをこの世から連れて行ってしまったのだろう。

母親ならば、リコちゃんのこれからの人生の可能性を奪おうとしたりするだろうか。

そこまで考えたところで、こういうひとつの結論がぱっ

と浮かんできて、背筋に寒気が走る。

あれは、リコちゃんのお母さんの姿だけを借りた、何か別のものだったのではないかと。

僕は今でも、雨の日の夜が怖い。

(第一話 完)

第二話
ひび割れ地蔵

私が小学校五年生の頃の話。

当時、周りを山と海に囲まれた、小さな村に住んでいた。

部屋がいくつもある、古くからの屋敷が自宅だった。

学校が終わると、仲間と一緒に遊ぶ時間。

川へも行ったし山へも行った、怪我など全く怖くなかった。

だが、怖い場所が一つだけあった。

墓場だ。

砂浜の向かいにある、古びた墓地。

学校一の悪がきであった私でさえも、そこに一人で行くことはためらわれた。

かなり昔に作られたらしく、周りを囲んでいるのはブロックではなく、簡素な木の柵。それもほぼ朽ち果てていて柵の役割を全く果たしていない。

中に置かれた墓石のほとんどは太平洋からの生ぬるい潮風によって形が崩れ、苔と黒ずみにまみれている。

山の方にある寺が大きな墓地を持っているので、ここはほとんど使われていないはずなのだが、それでもたまに年寄りが墓参りをしているのを何度か見たことがあった。

その時、年寄り達は必ず、墓地の中央に置かれている地蔵に水をやって拝んでいた。大人の足から膝の高さぐらいの平凡な形の地蔵なのだが、不思議なことに傷みも汚れもなかった。周りの墓石が悲惨な状況であるにも関わらず、その地蔵だけだ。

なので、この地蔵には何かあるぞ、という噂が私達の間で囁かれていた。

8月の放課後。誰が言い出したのかは覚えていないが、その墓地で友人達と肝試しをすることになった。夜に、あの地蔵の前まで行こうというのだ。

夜7時ぐらいだったか。上手いことを言って家を抜け出し、墓地で友人達を待ったが、集まった人数は予定よりも少なかった。

夏だったので真っ暗というわけではなかったが、それでも足元が見えない程度には暗かった。

その時集まった三人を率いて、私は墓地へと入った。元々墓地自体が非常に小さいものだったので、地蔵の所まではすぐに行くことができた。

地蔵の表面はやや水がかかっている、水差しには榊が供えられていた。

私達は地蔵の前で、しばらく立ち止まっていた。肝試しと言っても、何をするのかは具体的に決めていなかったのだ。

皆の表情を見渡すと、どうも無理をしているというか、早く帰りたいようなのが見て取れた。

だが、ここで私が「もう帰ろう」と言って引き上げたのでは、彼らと同じぐらいの度胸しかないと思われる。

「何だ、いつも偉そうに暴れてるあいつも、臆病なんじゃないか」

それは嫌だった。肝試しを果たしたという証が欲しかった。

だから、思い切った行動をとった。地藏の頭を、思い切り蹴飛ばしたのだ。

地藏は後ろに吹き飛び、そこにあった石段にぶつかり、軽石を叩いたような乾いた音を出して倒れた。

拾い上げて見てみると、顔の左側が完全に欠けていた。

周りの連中は、喋りすらせず、驚きの目でこちらを見ていた。その表情を見て、妙な達成感を持った。

壊れた地藏をその場に捨て置き、ぎこちなく歩く他の人間を連れ、私は意気揚々と墓を出た。

家に帰り、明日登校した時の同級生の反応を想像してほくそ笑んだ。すごいと尊敬されるのか、なんてことを恐れられるのか。いずれにせよ、前以上に一目置かれるだろう。

その夜、自分の部屋で眠っていた時、ふと眼が覚めた。

誰かが玄関の扉を叩く音がしたからだ。

父親か誰かが寝る前に外へ出て、そのまま鍵を閉められてしまったのかと思い、玄関へと向かった。

玄関の扉を見て、寝惚け眼が一気に覚めた。

扉に収まりきらないぐらいの、非常に大きな人間の影がゆっくりと扉を叩いていた。

蛙のような情けない叫び声を上げ、私は部屋へと逃げ帰った。家族に助けを求めようと、逃げてる間無茶苦茶に叫び続けたが、不思議なことに、誰も起きてくる気配はなかった。

駆け込むように、自分の部屋の襖を開けた瞬間、身体が凍りついた。

編み笠に白い服を着た修験者が、部屋の中央に立っていたのだ。背丈は大きく、今にも天井に頭がつきそうぐらい。

何も言わず、ゆっくりと一歩ずつ近づいてくる。歩くたびに、畳を石で叩くような音を立てて。

そいつは恐怖で動けなくなっている私の目の前までやってくると、その石のような冷たい手で私の顎を持ち上げ、笠の内側から覗き込んできた。

その時、そいつの顔をはっきりと見た。

顔の左半分が砕け、石の肌が赤黒く変色した地蔵であった。

翌朝、玄関で気絶していた所を家族に叩き起こされた。

家族に言われて鏡を見てみると、顔の左側、眼から鼻の周辺にかけて、内出血を起こしたかのような見るからに痛々しい痣ができていた。

父に問い詰められて昨日の出来事を話すと、即座に寺へ連れて行かれ、住職に引き合わされた。

だが、住職は申し訳なさそうに「これはできん」と言った。

「ただ一度の過ちでここまでされるのは可哀想だが、諦めないかん。ちょっとばかり怒りっぽいのにちょっかいかけてしまったんやなあ。これはいつ消えるか、申し訳ないけど分からん」

それ以後、その痣が負い目となった私は気弱な性格となり、何事にも酷く怯えるようになった。また、痣そのものが見た目に響き、色々な所で苦勞させられた。

もう30年は経つが、消えるどころか最近は痣がより一層濃くなった気がする。まだまだ許されてはいないようだ。

(第二話 完)

第三話
怪電話

ある日の午後のことである。

私は輸入雑貨の会社で働いているのだが、頻繁に取引をしている得意先に尋ねたいことがあり、電話を掛けた。何度もコール音が鳴った後、ようやく繋がった。

だが、受話器から聞こえてきたのは、いつも聞きなれた事務の女性社員の声ではなかった。ごうごうと、激しく風が吹き荒れるような音。

そして、何か硬いものが倒れたり、ぶつかりあったりする音。

何事かと思いじっと聞いていると、それらの音に混じって人の声が聞こえた。それも、何十人もの男女の笑い声。非常に甲高い、まるで発狂して白目を剥き、ひたすら笑い続けているかのような、理性の感じられない声の集まりが電話口の向こうから響いてきた。

思わず叫び声を上げ、受話器を落としてしまった。恐る恐る受話器を拾い上げ、ゆっくりと耳に当ててみたが、既に電話は切れていた。

かけ間違いか何かかと思い、もう一度電話を掛けてみたが、延々とコール音が鳴るばかりで、誰も出ようとしない。何が起きているのか、全く訳が分からない。気味が悪くなってきたので、その日は連絡を諦めた。

そして翌日、会社の上司から、その得意先で火事が発生したことを聞かされた。

建物は全焼し、その時社内にはいた二人の社員が逃げ遅れ、焼け死んだらしい。

そして、火災が発生したのは昨日の午後三時頃。

前日、私が電話する二十分ほど前のことだった。

(第三話 完)

第四話
眠り女

金曜の夜はマンションに帰らず、朝まで飲み場で過ごすことにしている。

もう30代も過ぎようとしているのに毎週オールナイトなんて、大人げないと思われるだろうが、何も好きで飲んでいるわけではない。飲むのが嫌になったらカプセルホテルで一夜を明かすこともある。

とにかく、金曜の夜は我が家に近づきたくないのだ。

三年前の秋頃だったかと思う。

週末、俺はいつもと同じように、仕事を終えて自宅に帰ってきた。

途中、妙な石を蹴飛ばしたとか、誰かに酷いことをしたとか、そういったことは一切ない。何の前触れも思い当たる理由もなく、それは起こっていたのだ。

電気を点けた瞬間、腰が砕けんばかりに驚いた。

ベッドの上で若い女が布団にくるまった状態で、その長い髪を周りに広げて寝息を立てていた。

顔をそっと覗き込んでみると意外にも美人であったが、全く知らない女だ。

鍵は掛かっていた。窓も同様に、更にここは7階だ。

一体何者なのか。警戒心よりも好奇心が若干勝り、俺は女の頬をそとつついてみた。妙に冷たいが、柔らかみがある。

妙なことに気がついた。確かにに寝息のような呼吸音はするが、その肝心の呼吸自体が女から発せられていないのだ。試しに顔の前に手を当ててみたが、一切空気を感じなかった。

更にもう一つ、この女が着ているものは、どうみても死に装束だ。

どうしよう、警察に相談しようか、などと考えもしたが、特に何かが盗まれたというわけでもない。

それに、丁度この頃彼女にふられたばかりで、女に対してはかなり飢えていた。これは奇跡的なシチュエーションなのかもしれない。アニメやマンガでよくある「押し掛け」というやつだ。

だが、襲うのはさすがにまずい。ここは一声掛けて、相手と話をして関係を築いてからでなければ。俺は女の肩をそっと揺すった。

女がけだるそうな声を上げ、体を左右に揺らす。

その途端、辺りが激しく揺れ始めた。咄嗟にちゃぶ台の下に隠れたが、しばらくすると揺れはぴたりと収まった。

ベッドの上を見ると、女は何事もなかったかのようにすやすや眠っている。

気を取り直して、今度は女の頬を軽くはたいてみた。

女は顔をしかめ、右手で俺の手を鬱陶しそうに払う。

再び激しい揺れが起きた。更にそれに加え雨が降り出し、雷までもが鳴り響いた。

女のまぶたが微かに開く。

それに合わせるかのように揺れは激しさを増し、窓の外からは轟音とまばゆい光。

ひょっとすると思ひ、俺はふらつきながら女の両目に手を被せた。

揺れは徐々に収まり、外は静かになった。

手をどけると、再び女は眠りについてた。

全く以て未知のことなのであるが、どうやらこの女が起きると、悪い事が起きるらしい。なので、その眠りを妨げてはならないようだ。

じゃあ、どうすればよいのか。思案している内に、俺は床の上で眠ってしまった。

目覚めると、女はいなくなっていた。

布団は綺麗に整えられていたが、微かな女の匂いが残っていた。

だがそれ以来、女は毎週金曜夜に、眠ったまま俺のベッドに現れるようになったのである。

だから俺は、その日は家に帰らないのだ。

怖いからではない、目の前の柔らかい据え膳を食べないというのが、何とも遣りきれないからだ。

土曜の朝に帰ると、決まって微かに香気が漂っている。

それが、何とも歯痒い。

(第四話 完)

第五話
蜃気楼

去年の夏、長い休みをとって海外旅行に行った。

場所はオーストラリア。海沿いのホテルに宿を取って、ガイドと一緒にカンガルーのいる草原に行ったり、海で泳いだりしていた。

その中でも最も驚かされたのが、蜃気楼だ。陽炎漂う暑さの中、海岸線をぼーっと眺めていると、時々ではあるが、今までになかった風景が現れる。それは近くにある草原であったり、町であったり、はたまた逆さの船であったり。そういったものを見るのは人生で初めてだったので、いたく感激させられた。

日にちには余裕があったので、私は時間さえあればホテルの窓から、あるいは浜辺から海岸線を眺め、蜃気楼の出現を待ち望んでいた。

そんなある日のこと。

いつものようにホテルのベランダでくつろぎ、双眼鏡で海岸線を眺めていた。何もない海岸線をじっと見ているのも退屈なんじゃないのか？　と思われるかもしれないが、これはこれで結構楽しいものであった。

日本でのこと、明日の予定、その他色々なことを考えていると、海の向こうにぼんやりと何かが浮かんできた。

おぼろげだった像は、時間が経つに連れて徐々にはっきりした形へと変化していった。

その形を見て、あっと口に出してしまった。

双眼鏡越しに見える、白い壁にこげ茶色の屋根の三階建て、それは間違いなく日本にある私の家だった。
遥か離れたオーストラリアの海に、自宅の幻が浮かんでいたのだ。

それはその後も数時間以上映し出されていた。海辺にいた人間が集まり写真を撮ったりしていたので、
私一人の幻覚ではなかったはずだ。

その夜、日本から連絡があった。

今日、隣家で火災があり、死者こそ出なかったものの、私の家諸共全焼してしまったらしい。

まさかと思い、火災が起きた時刻を聞いてみたが、丁度あの奇妙な蜃気楼が発生していた時間だった。

(第五話 完)

第六話
放浪の喫茶店

旅とは、素晴らしいものである。

見知らぬ町に行き、異邦人となってその町を歩き、良さを発見する。地元の小さな飲食店を見つけて、思いもかけぬ美味しいものを口にできれば、なお思い出深い旅となる。

そんなわけで、いつものように地方の町を歩いていた時のこと。場所は確か、岡山県の辺りだったと思う。

春だというのに太陽がよく照っていて、すっかり喉が乾いていた私は、どこか喫茶店がないかと辺りを見回していた。

すると、なかなか良さそうな店を見つけた。

港町には少々不似合いな小型のログハウスであったが、ランチメニューの書かれた黒板や、窓際に並べられた観葉植物が、何とも穏やかでよい感じだった。

早速、店に入った。

椅子が三つほど置かれたカウンターに、テーブル席二つ。

カウンターの裏から店主らしき壮年の男性が顔を出して、微笑んだ。

「はい、いらっしゃい！」

暖かみがあって、安心できる声だった。

私はカウンターにつき、しばらくメニューを眺めた後で、ミルクセーキを注文した。大の男がミルクセーキなんてと馬鹿にされるかもしれないが、私は幼い頃からこれが大の好物なのだ。

先ほどと同じく愛想のよい笑顔で返事をした後、店主は調理を始めたが、何とも手際がいい。卵を割って黄身と白身を分ける動作も、ミキサーの使い方も、経験を感じさせる。大層美味しいものができるぞ、と期待が高まった。

そして、筒状のグラスに入れられて運ばれてきたそれを、細いストローで飲んだところ……。

すごく美味かった。こちらの予想を、遙かに超えてきた。

ミルクセーキというのは、牛乳が卵黄の甘味と旨味を引き立て、なおかつ出しゃばらせすぎないのがよいと勝手に思っているのだが、このミルクセーキはまさにその究極態だ。

まったりとしていて、それでいて後味すっきりとした甘さ、わずかに残った卵黄の小塊を、牛乳で溶かす喜び、今までの人生でも、これからの人生でも、これに勝るミルクセーキはないと確信する。

ゆっくりと時間をかけて飲み干した後、私は金を払って店を出た。店主は最後まで、にこやかな笑みを浮かべて送り出してくれた。

それから数分ほど歩いた後、店にかばんを忘れていたことに気がついた。

これはいけないと思って慌ててその場所に戻ると、店がなかった。周りの建物からして、その場所にあったのは間違いなのに、代わりに建っていたのは、とうの昔に潰れたと思われるコンクリート製の二階建てビル。

その入り口に、私のかばんが立てかけられていた。

だが、怖さだとか、不気味さだとかは、不思議と感じなかった。数え切れない旅だもの、こんなことであるさ。むしろ、良い思い出になった。

それからというもの、私は行く先々で、この喫茶店に出会うようになった。

寺町だったり、山の麓の村だったり、雪の積もる町だったり。南の島の浜辺で見かけた時はさすがに度肝を抜かれたが、それでもうれしい限りだ。どこにでも、変わらぬ姿で現れる。

店主も全く変わらず愛想はいいが、客はいつも、私一人。頼むのはもちろん、ミルクケーキ。一つ気になるのは、未だに店主の顔が覚えられないことだ。

その店を後にして、店主の顔を思いだそうとする度に、ぼんやりとして頭に思い浮かばない。再度訪れた時改めて彼の顔を眺め「そういえば、こんな顔だったか」と納得する。その繰り返しがずっと続いている。

カメラでも持って行けばいいんじゃないかとも思うが、それはしてはいけない気がする。パシャリと撮った瞬間、何もない場所に放り出されて、二度とこの店にも店主にも会えなくなるのではないかと思う。

まあ、あの絶品のミルクケーキに比べれば、このような不思議など、些細なことだ。

(第六話 完)

第七話
青空を舞うもの

私は空を眺めるのが好きだった。

特に青空が好きだった。休日、河原の土手に寝転がって、まっ青な空を見上げたりなんかすると、一気に気持ちよくなる。身体が空と溶け合い、自分もその一部となって漂っているかのような気になれる。

高いところから、双眼鏡で辺りを見回すのも好きだった。毎週土曜日の昼、近所にある記念公園の展望台に通うのが日課で、スタッフにもすっかり顔を覚えられていた。

備え付けの望遠鏡なんて使わなかった。お金がかかるし、制限時間もあるし、何より私の持っている双眼鏡の方がずっと精度がよかった。

変わらない景色を眺めること、そしてそこに微妙な変化を発見することが楽しかったのだ。

そうしてその日も、展望台から向こうの山の辺りを眺めていた。

数分眺めていると、なにやら黒い粒のようなものが山の上に近づいてきた。鳥かな、とも思ったが違った。大きすぎる。

双眼鏡の倍率を上げて、食い入るように見つめると、粒が拡大され、おぼろげながらそれが何か、かろうじて理解することが出来た。

人だった。

上半身裸にジーパンらしきものを履いた男が両手を広げ、下降しないスカイダイビングといった感じの動きで、山の周囲を旋回していた。

あまりの事に一瞬、よくできた夢かとも思ったが、違う。目にレンズがあたる感触も、足でコンクリートの床についている感触も、間違いなく本物だった。

その得体の知れないものに対して恐怖心を覚えたが、目が放せない。

彼はしばらくの間飛び回っていたが、やがて突然体を下に傾け、山のふもとまで降りていった。そしてすぐに、彼は何かを掴みながら、再び空にあがってきた。

ぼやけていてははっきりとは見えないが、人間の足から膝ほどの大きさのものが激しく動いている。倍率を最大まで上げ、それが何かを確かめた。

人間の子供だ。帽子を被った人間の子供が、男の手に捕らえられ、必死にもがいている。

だが男は気にすることなく、更に高く上昇し、手を放した。

子供は落ちていった。

思わず声が出た。

途端、男がこちらを振り向いた。粘土細工のような生氣のない笑顔を、遙か遠くにいるはずの私に向け、そのまま迫ってきた。

私は双眼鏡から目を放し、そのまま逃げた。

私は双眼鏡から目を放し、そのまま逃げた。展望台を急いで降り、家まで一目散に自転車を走らせた。一切振り返らなかったが、男は追ってこなかったようだ。

翌日、新聞を見てみると、隣町で子供が変死したという小さな記事が載っていた。

それから、空は見なくなった。双眼鏡は処分し、展望台にも行かなくなった。

だがそれ以来、頭上に対してある種の恐怖を感じる。

ふと油断していると、伸びてきた両手が突然私の両肩を掴むのではないか、そしてそのまま持ち上げられ、遥かな空から一気にアスファルトへと叩きつけられてしまうのではないか、そんな感覚だ。

なのでこうして、外出時には日傘を差すことにしている。「男が日傘なんて……」と変な眼で見られることはしょっちゅうだが、もはやこれがないと青空の下を歩くことすらできないのだ。

(第七話 完)

第八話
鬼子を産んだ話

大正時代の北陸地方、とある村の地主の屋敷。

地主の妻が、いよいよ出産の時を迎えた。

一族の女達は産婆の手伝いにまわり、地主をはじめとする男達は隣の部屋でその時を今か今かと待っていた。

長い時間が経ち、火鉢の暖かさに誘われて地主がうとうとまどろみ始めた頃、「ああっ！」という産婆の驚く声、そして女達の叫び声が聞こえた。

その声に眼を覚ました男達が妻のいる部屋へ入った所、女達は皆真っ青な顔で震えていた。

「赤ん坊が、縁側へ逃げた！」

妻の実姉が叫んだ。

妻は出産の姿勢のまま、口から泡を吹いて昏倒していた。着物からは千切れたヘソの尾のようなものが覗いており、またそこから夥しい量の血が流れ出て、周囲を赤く染めていた。

産婆は冷静に、だが険しい表情で男達に言った。

「下におる！ 探し出して殺せ！」

男達は急いで縁側を探したが、何も見つけることはなかった。

妻はそれからほどなくして息を引き取り、産婆もまた、その数日後に流行り病で亡くなった。

女達の何人かは発狂し、精神病院に入れられた。

赤ん坊は盗まれたということにされ、警察による搜索も行われたが、何の手がかりも得られなかった。

その後、一族には不幸が相次ぎ、ほんの十年で、その家は完全に絶えてしまったという。

近畿地方南部に伝わる昔話。

(第八話 完)

二十年前。

大学受験を控えた私は、自宅の三階にある自分の部屋で寝る間を惜しんで机に向かっていた。

ひと段落つき、参考書から眼を離して時計を見ると、時刻は午前三時二十分。

そろそろ寝るかと考えていると・・・

「むううううううう」

家の外から男の唸り声がした。喉の奥から強引に搾り出すかのような、苦しさを伴った轟。

何事かと思い、窓を開けて外を見た。

街灯の下に、半裸にジャージズボンの男が立っていた。ぶよぶよの両手を高く掲げ、太った身体を左右に激しく揺らしながら言葉にならない声を上げ続けている。

男がこちらを振り向いた。焦点の合わない、虚ろな眼。

慌てて窓を閉めた。呻き声が徐々に遠ざかっていき、完全にそれが聞こえなくなった時、私はようやく動くことができた。

不快感の紛らわしも兼ねて、二階のリビングで何か飲むことにした。

リビングにて、ソファでホットミルクを飲みながらくつろいでいると、意識がぼんやりとし始めた。ああ、ダメだ、ベッドに戻らなきゃ、と思いつつも、瞼は徐々に閉じていく。

そうして、意識がほぼ無くなりそうになった時、タンスの上に置かれた電話がけたたましく鳴り始めた。だが、深夜の電話なんて、取る気がしない。私は電話を無視して、ミルク片手に三階へと避難した。

そして自分の部屋で耳を澄ませ、しばらく様子を伺っていたが、電話は一向に鳴り止む気配が無い。かれこれ、二分近くは鳴っている。

・・・ひょっとすると、何か緊急の連絡かもしれない。気は進まなかったが、電話をとることにした。

再び二階のリビングへと赴き、未だ鳴り続けている電話へと近づく。

そして、受話器をゆっくりと耳に当て、口を開く。

「……もしもし？」

荒い息遣いが聞こえる。

出なければよかったと思ったが、もう一度問いかけてみる。

「もしもし？」

「むううううううううううう」

さっきの男の声だ。

急いで受話器を電話機に叩きつけた。声は止まった。

かと思った時、今度はリビング中に呻き声が響いた。そこにあの男がいるかのように。

「むうううううううううううううううう」

(やめろ！ やめてくれ！)

私は逃げるように自分の部屋へと戻り、頭から毛布と布団を被り、耳をふさいだ。

だが、声は止まらない。

「やめろ！ やめろ！」

必死で叫んだ時、扉が開く音がして、私は大人気ない叫び声を上げた。

「一体なにしてんの、さっきから」

顔を出すと、母親が訝しげな表情を浮かべ立っていた。話しても信じてもらえそうにはなかったので、寝惚けていたと誤魔化した。

変な男が外で大声を出していなかったか、さり気なく聞いてみたが、全然知らないと言う。

大学へ入学するまでこの実家に住んでいたのだが、妙なことに遭遇したのは、後にも先にもこの一度だけであった。

(第九話 完)

少し昔のとある田舎町。

一人の青年が自室で書き物をしていると、突然耳元で「ふふっ」という、若い女性の声を聞いた。最初は空耳かと思ったが、何分かおきにそれが聞こえる。

若者は背筋が寒くなり、外へと逃げ出した。声は聞こえてこなくなった。

友人数名とともに喫茶店で暇を潰していると、店の主人が電話を取り次いできた。警察からであった。報せを受け早速家に戻ると、隣の家にはパトカーや救急車が停まり、野次馬が集っていた。

友人数名とともに喫茶店で暇を潰していると、店の主人が電話を取り次いできた。警察からであった。報せを受け早速家に戻ると、隣の家にはパトカーや救急車が停まり、野次馬が集っていた。

事情を聞いてみると、近くにある精神病院から気の狂った男が脱走し、この家に押し掛け、中にいた主人を包丁でメッタ刺しにしたのだという。

若者の家にも警察が来ていて、調べ物をしていた。

なんでも、犯人は最初、この家に進入したのだとか。

それ以後、例の笑い声が聞こえてくることはなかった。

(第十話 完)

「新しい靴を下ろす時は、使い終わったマッチの灰で靴の裏に「〇」を書かなければならない」

我が家には、古くからこんな迷信が伝えられている。玄関には常に徳用のマッチ箱が置かれ、父も母も靴を買ってきた時は大真面目にこのまじないを行い、私にも「忘れないうちにあれをやれ」としつこく注意してくる。

「これをしないと悪いことが起こる」

と皆言うが、具体的に何が起こるのか、教えてくれない。

そもそも靴とマッチ、何の関連性があるって、何故靴の裏に○を書く必要があるのか、全く意味が分からないし馬鹿馬鹿しい。中学時代の私はこのまじないがとにかく嫌いであった。

そしてある日のこと、バイト代で当時流行っていたスポーツシューズを買ってきた私は、あのまじないなしで靴を下ろすことにした。特に大きな理由はなく、些細な反抗心に因るものだ。

玄関に置いたシューズに右足を入れようとした時、ふと視線を感じて、顔を上げると――
わずかに開いた扉の隙間から、能面のような顔の女がこちらを覗きながら、目を細めて微笑んでいた。

それ以来、私はこのまじないを欠かしたことはない。

(第十一話 完)